企画展
Special Exhibition

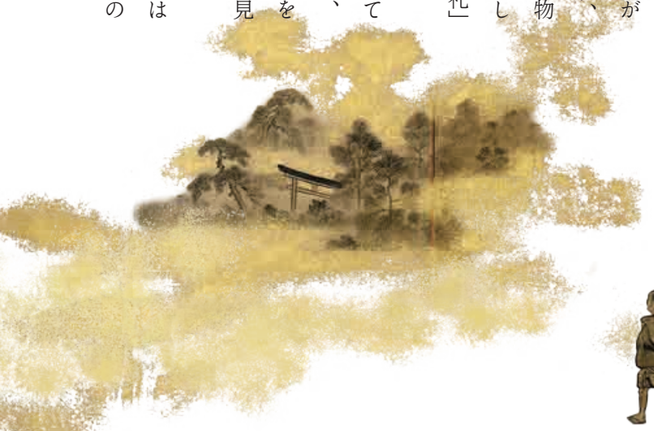
祭礼行列 渡る神と人

Parade of Shinto Festivals

全国各地の神社では、春夏秋冬、さまざまな〝まつり〟が行われています。これは、限られた人のみで行う「祭（まつり）（祭祀）」と、多くの見物人が集まる「祭礼（さいれい）」とに区分することができます。この区分は、民俗学者の柳田國男が『日本の祭』（弘文堂書房、昭和十七年）で示しました。柳田は、日本の〝まつり〟における最も重要な変わり目は「見物と称する群れ」（見物人）の発生であると考え、特に美しく華やかで、見物人が集まってくる〝まつり〟を「祭礼」と呼んでいます。

このような「祭礼」は、京都で成立・展開し、やがて各地で行われるようになりました。また、この過程で、時代や地域の文化の影響を受けています。各地の祭礼を比較すると、共通点が見出せるのと同時に、独自性も見出せるのはこのためです。

そして、祭礼は、行事の把握や見物のため、あるいは美術として絵画にも描かれました。本展示では、祭礼の展開やその見どころを、絵画を通して紹介します。



「やすらい祭・上賀茂競馬会図屏風」〈横山華山〉より

近代の祭礼

明治時代になると、政治・社会情勢を含め、神社をめぐる環境や制度は大きく変化します。さらに、暦も太陰太陽暦から太陽暦に変更されました。これらの変化のために、神社の祭祀・祭礼は執行日を含めて、それまで通りに行うことはできなくなりました。

例えば、それぞれの神社において、一年のうちで最も重要な祭祀を制度上「例祭」とするようになると、それまで重要な行事として行っていた祭礼などは、「例祭」とは区別されて行われるようになります。これは一般に「私祭」とも呼ばれました。祇園祭、伏見稲荷大社の稲荷祭、下御霊神社の神幸祭・還幸祭などは、近代には「私祭」として続けられています。

一方、京都に平安神宮、札幌に札幌神社（現在の北海道神宮）が創建されると、例祭とは別に、神輿や鳳輦（ほうれん）を伴った祭礼（それぞれ時代祭、札幌まつり・神輿渡御）が行われるようになります。

このように、近代は祭礼にも大きな変革が起こった時期であるといえます。

「上御霊神輿渡御之図」（「稲荷神社両御霊神社私祭之図」〈国井応文〉）

「官幣大社札幌神社鎮座三十年紀念祭市街御巡幸之図」〈栗田鉄馬〉

企画展

祭礼行列 渡る神と人

会期：平成28（2016）年10月15日（土）～12月4日（日）

監修：笹生　衛（國學院大學博物館館長・本学教授）
執筆：大東敬明（本学准教授）
編集・展示：鈴木聡子（本学助教）・吉永博彰（本学PD研究員）
陣内理良（國學院大學博物館学芸員）

ミュージアムトーク

無料
申込不要

場所：國學院大學博物館ホール

- **10/22（土）** 14：00～14：30
  鈴木 聡子（本学助教）**「賀茂祭（葵祭）」**
- **10/29（土）** 14：00～14：30
  大東 敬明（本学准教授）**「祇園御霊会から札幌まつりへ」**
- **11/12（土）** 14：00～14：30
  笹生　衛（当館館長・本学教授）**「神輿と行列」**

國學院大學博物館
Kokugakuin University Museum
〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28〔國學院大學渋谷キャンパス内〕
TEL：03-5466-0359　WEB：http://museum.kokugakuin.ac.jp/

本展示は國學院大學学術資料センターで進めている研究事業の成果の一部である。

※神社名・祭礼名・地名などには、歴史的変遷がありますが、可能な限り現在の名称を使用しています。

渡る人々

祭礼行列の中には、神の移動を目的とせず、神輿を伴わない行列があります。

それは、神事などを行うために神社に向かう人々の行列で、賀茂御祖神社（下鴨神社）・賀茂別雷神社（上賀茂神社）の賀茂祭や、春日大社の春日若宮おん祭のお渡りがその代表です。行列の中心は勅使（天皇の使い）、御幣、唐櫃に収められた幣帛などの供え物、あるいは芸能者であるといえます。

賀茂祭は、勅使が両社に参向し、神に対し、天皇からの捧げ物を奉り、宣命（天皇の言葉）を読む神事を中心とします。

平安時代には、勅使と斎王（神に仕える未婚の皇女）を中心とするそれぞれの行列が一条大路で合流し、両社へと向かいました。大路は、この美しく飾られた行列を見物しようとする人々で溢れたといいます。

「葵祭図屏風」〈西村楠亭〉

渡る神輿

神輿は、神を乗せて移動するためのものであり、現在は、全国各地の〝まつり〟でみることができます。しかし、神輿が〝まつり〟に出るようになるのは、平安時代の中頃のことで、これは日本の〝まつり〟の歴史上、重要な節目となりました。

この頃、平安京に住む都市民は、新たな祭祀の方法を考えました。それは、八坂神社、伏見稲荷大社、松尾大社などの平安京の周縁に位置する神社の神を京中の御旅所に遷して祭祀を行い、また、神社へとお戻りいただくという形式です。神社に坐す神を、神輿に乗せて動かすことができるという考えの発生は、日本における神観念の画期となりました。

この御旅所との往復の際には、神輿を中心に田楽や獅子など様々な芸能を伴った行列が組まれました。さらに、これは見物の対象になりました。十二世紀後半に描かれた『年中行事絵巻』には、祇園御霊会、稲荷祭などの行列を見物する人々が描かれています。

このような神輿は、この後、各地に伝播し、〝まつり〟の象徴になっていきました。

神輿には、様々な芸能も付随し、行列や祭礼を賑やかにしています。これは、紀州東照宮、和歌祭の餅搗踊（手合せ）です。

「和歌浦御祭礼御渡絵巻」より

「年中行事絵巻」祇園御霊会〈旧岡田本〉

「香取神宮神幸祭絵巻」

渡る山鉾屋台

山・鉾・屋台は、神輿の行列に加わることも多くあります。これらは行列や祭礼を賑やかにし、囃すことを目的としています。

全国各地には数多くの山・鉾・屋台が出る祭礼があります。このうち、三十三の祭りについて、政府は、ユネスコ無形文化遺産登録に向けて提案しています。

山・鉾・屋台などのいわゆる「山車」「楽車」について、神が依りつくもの（依代）と説明されることがあります。しかし、芸能を演じる移動式の舞台、芸能に用いられたり、行列に出たりしていた道具や作り物が華美に、かつ大きくなり、車をつけたもの、あるいはこれらが組み合わさったものと考えることもできます。

八坂神社の祇園祭の山鉾は、鎌倉時代末期から室町時代にかけて、現在に通じる姿へと展開していきます。一方、山・鉾・屋台を伴う祭礼が全国に広がるのは江戸時代以降のことです。それは、各地に新たな城下町等の都市や町が成立し、山・鉾・屋台を作る技術や文化的基盤、維持する組織が形成されたためです。

「祇園祭礼絵巻」〈冷泉為恭〉

「神田明神御祭礼番附」（安政６年版）